

明治に生きたふたりのこころ

～殉死と反逆～

「舞姫」は豊太郎の遺書である。豊太郎は船中で手記を書いたあと自ら命を絶った。私がこのように考える理由は「舞姫」の文面にある。まず、豊太郎は「これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり」と、手記を書いた本当の目的を明らかにしていないこと。次に、「舞姫」の文面全体を通しての沈んだ雰囲気。「舞姫」には「熾熱灯の光の晴れがましきもいたづらなり」「浮き世の憂きふしをも知りたり」といったことなく暗い印象を持つ言葉が多く使われている。ただのドイツでの出来事、思い出をつづった日記にしては文面が重すぎるだろう。私はこの暗い雰囲気が「豊太郎の死」を暗示しているのではないかと、ということを感じた。また、「世を厭い、身をはかなみて、腸日ごとに九回すともいふべき惨痛」この一節は豊太郎の深い悲しみや苦しみを表しており、「ああ、いかにしてかこの恨みを鎮せん」からは悔恨の思いを消し去ることができない様子が伺える。そして決定的なのは「今宵はあたりに人もなし」という場面。私が豊太郎の死をより強く確信したのはここだ。悔恨を消し去ることができない、しかも今夜は周りに人がいない。この時、私は悟った。豊太郎はその後、船中で自殺したのではないかと…

人それぞれ解釈は違うだろうが、ここでは豊太郎が自殺したという私の解釈を前提に話をすすめていきたいと思う。ここからはなぜ豊太郎は自殺したのかという論を展開していきたいのだが、実はこのレポートの本当のテーマは別のところにある。私は豊太郎の自殺について考えているとき、同時にある人物が浮かび上がってきた。その人物とは「こころ」の先生である。なぜ「舞姫」と「こころ」が私の頭の中で結びついたのかというと「舞姫」のもつ沈んだ雰囲気がなんとなく「こころ」の雰囲気と似ているような気がしたからだ。そしてそのこともまた私が豊太郎は自殺したと解釈した理由のひとつだった。「こころ」が先生の遺書なら「舞姫」は豊太郎の遺書だという可能性もあるのではないかと思ったのだ。また「舞姫」と「こころ」は共に明治時代を背景とした文学作品である。つまりそれぞれの登場人物の先生と豊太郎は同じ時代に生きていたということだ。しかし同じ明治の風潮のなかにいながらも私の目には先生と豊太郎の生き方はなんとなく違って見えた。私は「こころ」の授業ではKの自殺について考えていたので、先生についてはあまり知らなかったし先生の自殺についても深く考えたことはなかったが、「舞姫」と「こころ」の持つ似た雰囲気からこの機会に豊太郎だけでなく先生の自殺についても少し考えてみたいと思った。そして先生、豊太郎の両方の生涯、自殺に至るまでを「明治に生きたふたりのこころ」というテーマから私なりに考えてみることにした。

(1)先生の自殺

これは先に結論を述べておきたい。私は先生は明治の精神に殉死したのだと考える。しかし先生は最初から明治の精神に従って生きて来たのかどうか、と考えるとそうではない。先生は幼い頃、家が裕福だったため鷹揚に育てられ、そのおかげで子どものような無邪気な心を持ち、人を疑うことを知らず自分の心のままに生きる自由な人だった。そのことが伺える行動としては彼が叔父の娘との婚約を断ったことだ。当時の明治の精神は「滅私奉公」。上のものに従い、国のため、家のために自分の感情を押し殺して生きることが当たり前だった。叔父の娘との婚約も先生が亡き父親の家を復興させるため、つまり家のための政略結婚だったと考えられる。しかし彼はそれを断った。「厭なものは断る」という彼の自由な考えは明治の精神すらものともしないものだったのだ。しかし時代は明治、このような考えがいつまでも通用するはずがない。その報いとして彼は叔父に裏切られる。しかしそれでもなお先生は自由人だった。そう考える理由は先生はずっと仕事につき家にはいたというところにある。父親の遺産は叔父にほとんど取られたにしても彼にはまだ働かなくても大丈夫、むしろ「新しく一戸を構えて見ようか」という気になるほどの余裕があった。ちょっとリッチな引きこもりという感じだろう…ここまでは先生が自殺を考えるような要素は見当たらない。叔父のせいで人間不信になってはいたが、人とのかわりを持たず引きこもっていた先生はそれはそれで自由だったのだから。

では先生が自殺を考えるきっかけとなったのは何だろうか。それがKとの友情、お嬢さんとKとの三角関係、そしてKへの裏切りだ。先生は叔父の裏切りによって、人を信じることができないう人だった。「冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れて」とあるように先生は人の目を絶えず意識し、人との交わりを極力避ける孤独な人だった。また他人に対して異常なまでの敵意を持っていた。実際、Kが自分に助けを求めたときも、先生は「精神的に向上心のないやつは馬鹿だ」とKをはねつけてしまった。そして自分が人に裏切られるという辛さを知っているにも関わらず親友であるKを裏切った。つまり自分を裏切った叔父と同じことを親友のKにしてしまったのだ。そしてKは自殺してしまう。Kの自殺の本当の理由は孤独を知ったからで先生の裏切りが原因ではないのだが、当時の先生はKは自分の裏切りが原因で自殺したと早合点してまった。そのKに対する裏切りという罪悪感が、おそらく先生の自殺を考えるようになったきっかけだろう。しかしそれだけでは不十分である。人間は何かを決心しても一歩踏み出させてくれるようなきっかけがないと実行に移すことができない生き物だ。先生は自殺を考えはじめてからも「此儘人間の中に取り残されてミイラのように存在していこうか、それとも…」といつも心のなかで繰り返していたという。それとも…に続く言葉が自殺であることは言うまでもないが、しかしその頃先生には自殺に踏み切る勇気もきっかけもなかった。そんな先生の自殺の決め手となったのは明治天皇の崩御、そして乃木大将の殉死だと考える。「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました」。

そこでようやく先生は今まで忘れていた明治の精神というものを思い出し、自分の生き方が時代遅れだと感じ、明治の終わりとともに明治の精神に殉死する決心をしたのだ。

(2) 豊太郎の自殺

① 「反逆児」豊太郎

まず豊太郎の人物像について考える。彼は幼い頃から厳しい教育を受け、大学を主席で卒業するほどの頭脳の持ち主だ。国のお勤め人で、ドイツへの派遣の依頼も近代化を目指す国のため、自分の上司のため、女手ひとつで自分を育ててきた母のため、そして自分の名誉のために快く引き受ける。これだけでも豊太郎は明治の精神の備わったすばらしい人材だということが伺える。人々が彼を嫉むのも納得だ。しかしそんな豊太郎を彼自身は「我ならぬ我」と述べており、また本当の自分を臆病者だととらえている。自分は自分のためではなく人に流されるままに生きている、学問の道をたどったのも人がしいたレールの上をたどっただけ、本当は外の世界に出たいのにその勇気がないから自分の殻に閉じこもっているだけだと。

一方、私は豊太郎は「時代に必死に逆らおうとした反逆児」のような人物だと考える。人間には、社会のルールや学校の規則などの決まりごとに逆らいたくなる性質や、社会に逆らって自由に生きている人にあこがれる傾向がある。豊太郎もおそらく同じような感じだと思う。ドイツで自由に生きている人たちを見て今まで日本で受動的に生きてきた自分、人の言いなりにしかなれない自分が嫌になり、そのような自分、そして人の言いなりになって生きることが当然だと考えられていた明治の精神に逆らいたくなかったのではないだろうか。つまり彼はひそかに明治の精神への反逆心を抱いていたのだ。そして彼の「反逆」という心がエリスとの恋に結びついたのだと思う。

エリスは踊り子だった。踊り子という職業は社会的に身分が低い人がする仕事とされていた。明治時代、ただですら男尊女卑の考えが強かったのに加え、さらに踊り子という社会の下の方で生きるエリスと日本のエリートである豊太郎の恋は周りから見たら常識で考えてあまり良いものではなかったはずだ。だから豊太郎はそんなエリスと交際をすることで偽の自分や社会の常識に逆らいたかったのだと思う。こう考えるとエリスとの関係が上司にばれて解雇された後もいっこうに交際をやめようとしなかったことの説明もつくだろう。これは私の想像だがもしエリスが踊り子ではなくどこかのお金持ちのお嬢さんだったら、豊太郎はそこまでエリスに惹かれたりしなかったと思う。エリスが初め豊太郎に経済的な助けを必要としたように、豊太郎もまた踊り子であるエリスの存在が必要だったのではないだろうか…

しかし、豊太郎の小さな反逆は相沢や大臣の訪問により失敗に終わる。大臣からの帰国の申し出に豊太郎は首を縦に振ってしまったのだ。そこには相沢たちの様々な策略のよう

なものが見られるが、豊太郎が最終的に人に流され自分の意志を伝えることができなかったことは事実だ。つまり豊太郎は明治の風潮に敗北したのだった。そして帰国途中、船中で手記を書き、それを書き終えた後、自らの命を絶った。私の解釈でいくと「舞姫」の話はここで終了となる。

② 豊太郎はなぜ自殺したのか

では豊太郎の自殺の理由は一体何だったのだろうか。

もちろん失意からというのが一般論だろう。私も初めはそう考えた。自分を連れ戻した相沢に、大臣に、明治の精神に、そして何より他人に流される弱い心から抜け出せない自分自身に失望したから命を絶ったのだと。またエリスに対する申し訳なさからだとも考えられるかもしれない。恋人を発狂させ、さらにお腹の中の自分の子どもも置き去りにして、自分はぬけぬけとまたエリート街道をすすむというのも後味が悪いだろう。しかし私は豊太郎の自殺の本当の理由についてこう思う。豊太郎は自分の意志を示すために自らの命を絶った、つまり最期は反逆児として死んだのだと。自殺というどうしても「世間に絶望した人がすること」「現実から逃げるためのずるいこと」といったネガティブなイメージがつきまとうが、私はあまりそうは思わない。もちろん自殺はしないにこしたことはない。生きながら自分の意志を言うことができる人になるよう努力することが1番いいことだ。しかし、それが適わない場合、自殺も自分の意志を示すための手段だと言えると思う。自殺しようとするのは自分だから、自殺も考えようによっては立派な意思表示なのだ。(強制的に自殺に追い込まれたとかいうのは別だけど) 豊太郎は自分が人に流され、自分の意志を伝えることができない弱い人間だということを知っていた。日本に帰ってもこの弱い自分から抜け出せない、このまま生きていても自分は明治の風潮に埋もれてしまうだけなのではないか…と考えた豊太郎は自殺という意志表示によって明治の「滅私奉公」という風潮に逆らったのではないだろうか。豊太郎は最期に「反逆」を成し遂げたのだ。

先生と豊太郎の自殺についての私の考えは以上だ。だらだらと長くなってしまったので簡単にまとめたい。

(1)先生 自由に生きてきたつもりだが、罪の意識、明治天皇の崩御から自分がいかに明治の影響を受けていたかを知り、これからの時代に自分は時代遅れだと悟り、明治の精神に殉死した。

(2)豊太郎 幼いころから明治の精神に流されてきたが、ドイツの自由の風にあたりそれが偽りの自分だと気づき、自ら命をたつという自己決定をすることで明治の

風潮に反逆した。

私の解釈なので間違っているかもしれないが、私は先生と豊太郎、明治に生きたふたりの自殺をこのようにとらえた。一見、ふたりは生き方も価値観も異なっているように見えるが、ふたりの間にひとつ共通するものがある。それは「心の隙間を死であがなった」ということだ。先生は罪の意識、豊太郎は弱い自分という心の隙間をそれぞれ抱えていた。そしてふたりとも死を選んだ。（豊太郎が死ぬのは私の想像だけど…）彼らにとって命を絶つことは意味のあることだったのかもしれないが、本当に死ぬ以外に心の隙間を埋める方法はなかったのだろうか、という疑問が残った。この疑問についてはまた機会があれば考えてみたいと思う。

明治の精神に殉死した先生、明治の精神に反逆した豊太郎。ふたりとも明治という激動の時代を生きた。どちらの生き方が幸せなのかは私には分からない。正直に言うとどちらの生き方が幸せなのかということは私はあまり興味がない。ただ、このふたりの「こころ」は明治という時代が背景にあったからこそ引き立っていたのではないだろうか。

参考資料…教科書（森鷗外「舞姫」）、夏目漱石「こころ」